

沖

7

2023

俳句雑誌【白鳥】



封

印

能村 研三

昭和萬葉集

この夏、我が家を大幅に改修することになった。長女夫婦との二世代住宅にし、耐震補強を施すためである。現在置いてあるものを一端空にしてから工事をする事になったので、物持ちの良い人にとっては大変なことである。特に書籍類の数は尋常でなく、父の書庫、私の書庫、沖の書庫と大きく三つあるものを整理した。そんな中に『昭和萬葉集』という一冊の本を見つけた。

これは講談社から昭和五十四年に刊行された本で、全三巻・別巻一の「巻三」には、帯に「軍靴の響き満州事変昭和六年〜八年」とサブタイトルがつけられていた。

この本を開いてみると先師登四郎の歌が二首収められていた。

夏やけの杉の梢になく蝉の

にはかの黙し曇りそめたる

「装填」(昭和9・8)

うねりつつ秋の若枝の丈のびて

軒端にちかく花もちにけり

「装填」(昭和9・9)

この歌は登四郎、二十三歳の時に作った歌である。急性肺炎で伊豆の伊東に転地療養していた時期で、國學院大学を休学していた。

「能村登四郎年譜」を見ると、昭和六年の項に、「國學院の先輩牛尾三千夫にすすめられて釈道空の間接指導していた短歌同人誌『装填』の同人となる。同人中に広田栄太郎、鈴木裳三、近藤喜博、林翔などがいた」とある。

この「装填」という同人誌も古書の中から数冊が出てきた。発行者は広田栄太郎という国語学者で、黄色に変色した二十四ページの雑誌で登四郎の若い頃を知る本として貴重なものである。

『能村登四郎読本』には「私が短詩型文学の中で俳句を選んだことはやはり偶然なことではないのである。世界最小の詩型というものに、なんとなく魅力を感じたからであろう。もし短歌をやっていたら深まるにつれて詩型の疑問や煩悶はもつと多かつたにちがいない」と記している。

花ふぶき疾く走る川追うてぬし

躰ごと扉を押せりさくら冷

点眼の冷たし桜蕊降り

曇りても川面かがやく復活祭

春嵐朴一幹の響きけり

一艘もあらざる沖や春惜しむ

師系譜に一辺倒なる曝書かな

片白草封印したる一意かな

十葉を刈るか刈らぬか訃来たり

木の家に息づきのあり更衣

能村 研三

蟾 蜩 口 に 門 ある ごと し

白 藤 の 大 波 なら ば 溺 れ た し

楽 隊 に 浮 足 立 て る 羽 抜 鶏

ま く な ぎ に 好 か れ て み た る 優 男

郷 匂 ふ 築 地 の 鮎 の 小 振 り に も

飾 り 塩 鮎 の 矜 持 を 満 た し け り

夢 の 端 に 触 れ て 祭 の 笛 太 鼓

男気が感じられる登四郎先生なので、ぞかし祭の句などは多かろうと思つていたが、意外にも少なく、祭に対するご自分の熱気というよりは、へ祭馬はやり舎人の手に負へずの御句のように冷静に周囲の盛り上がり詠まれている。

祭のシーズンであるが、私の住んでいる茅ヶ崎市には七月の海の日に挙行される「浜降祭」がある。寒川町を含めた市内の各神社の神輿が夜中に神社を出て、それぞれの地区の自治会館で氏子等と合流し、四時ごろトラックで茅ヶ崎海岸へ向かうのである。そして砂浜に集結した三十九基が、開式の儀式の後一基ずつ順番に波打ち際まで進み、海に入つて裸ぎを行うが、胸ぐらひまで浸かつた担ぎ手の熱気で勇壮の観を呈するのである。浜での一通りの儀式が終わると神輿はまた自治会館に戻り、笛太鼓を従えて地区内を巡行する。いよいよ今夜あたりから笛太鼓の練習の音が聞こえてきそうである。

濤声集

逡 巡

千 田 百 里

禽 にな る 枝 垂 桜 の 中 に 佇 ち
五 月 来 る 然 れ ば 登 四 郎 忌 の 近 し

* 逡 巡 の 我 を 見 下 す 五 月 の 鷹
聖 五 月 鴉 に 白 き 羽 根 を や ろ
海 中 の 岩 に 噛 み つ く 卯 浪 か な
二 兎 追 は ず 甚 平 の 夫 追 う 七 を り

翅のみ死なず

辻 美 奈 子

* 夏 蝶 の 翅 の み 死 な ず 開 き け り
自 転 車 の サ ド ル を 上 げ て 初 夏 の 森
緑 蔭 を 歩 め ば 輝 き だ す 妊 婦
鱒 叩 く 音 高 々 と 九 十 九 里
通 し 鴨 水 輪 の 軸 と な り ぬ た り
筍 の 衣 冠 束 帯 に て 届 く

蒼茫集

飛道具

井原美鳥

畑焼きの煙に沈む峡十戸
ウォーリーを探すや雨のこどもの日
楠の木にありなしの風洗ひ髪
*許される飛道具とは草矢まで
黒南風や魚屋に笹の裸銭
眠らざるもの灯台と月見草

昭和の日

広渡敬雄

鳥雲に汽水の匂ひひろがりぬ
銅鐸高し春潮高し島を出づ
花筵畳みて零す五六片
*一弾をもて全山の花散らす
朧夜の灯すことなき浮御堂
米櫃のどんとありたる昭和の日

衣ずれ

細川洋子

葉脈は光の回路夏に入る
山折りに谷折り牡丹開きけり
*衣ずれといふ幽けさに白牡丹
白牡丹襷の数だけ皺りあり
で虫の角や雲行き変はりしか
絡みつくはがねの力鉄線花

真珠

栗原公子

*春愁の重さ真珠のネックレス
追憶は孤独な遊び春の風邪
春の土たして整ふ花時計
朝寝覚め夢の余白と遊びをり
引力の薄るるあたり花吹雪
手術台にて亀鳴くを確と聴く

飛鷹選評



能村 研三

レコードのノイズの静か春の半

坂井 博

作者の坂井さんと私はほぼ同世代なので、レコードの音の懐かしさは共有できる。蓄音機でSPやLPなどのレコード盤に針を乗せて音楽を聴いたものだ。時代の流れと共にレコードからカセットテープを経てCDへと変わっていった。レコード盤自体の手入れも必要で、手間が掛かることに新鮮さを感じる。レコード針をレコード盤の上にそつと落とすと、ポツ、ポツと曲が始まる前のノイズも魅力的で懐かしい。春の宵、作者も久しぶりに昔を懐かしんで静かに名曲を聴くことにした。

更衣 心の 枷を 解き けり

岩波 博庸

最近は一斉に更衣するのが薄れてきたが、少し前までは学校や官公庁では日を定めて、全員が冬服から夏服に更衣をした。夏服になっても、時には寒い日があったり、中々都合よくはいかないこともある。ただ、肌を感じる温度差だけでなく、更衣は人の気分を一変させてくれることもある。身軽な夏服となり心の枷が解けたようで、一層やる気が増してきた。

逃げ 水や 幾つ あり しか 分岐点

工藤 良不

実際は到底追いつくはずのない逃水なのだが、作者はいくつかの分岐点があると感じた。真つ直ぐな道だけでな

く、道がカーブしていたり、曲がり角があったりもする。分岐点があればいつか追いつきそうに思えることもある。

総 天然色の 夢の 今 なり 昭和の日

頓所 敏雄

「総天然色」とは懐かしい言葉だ。昭和三十年代の映画はほとんどモノクロであった。少しずつカラーの映画が始まってきたが、当時は総天然色などと物々しい言葉を使っていた。作者が若かりし頃の夢を見たのであろう。それも懐かしい色合いであった。

縄 文の 歴 史 紡 ぎ て 古 代 蓮

本間 照子

古代蓮は大賀博士によって縄文遺跡の丸木舟と共に縄文時代の舟だまりから発見された。古代人にも蓮を鑑賞する習慣があったのではないかと言われているが、縄文時代からの歴史を脈脈今に伝えている。

羽 抜 鶏 か ぜ 捉 へ ん と 走 り け り

中谷 恭子

羽抜鶏は夏になると鳥は冬羽から夏羽へと抜け替わり、この頃の羽はまだ整わないが、風を捉えようと走り出した。威厳を無くした姿を晒したままである。

鳶 の 笛 漁 港 の 昼 の 目 借 時

山中 洋子

早朝からの水揚げそして、魚市場での糶も終わり朝の喧騒はがらつと変わって静けさを取り戻した。漁港では鳶の笛だけが聞こえ鎮まりかえっていた。

雨 に 艶 色 は 競 は ず 杜 若

鳥居 公子

杜若は水をたっぷり吸って、葉も花びらも雨に洗われて瑞々しく見える。青紫色の花は、この季節にふさわしい色彩であるが、それにも増して雨に濡れると鮮やかであった。

潮鳴集

陽炎の高さ

須賀ゆかり

* 陽炎の高さを滑る貨物船
母のなき里は旅とも春の雲
武士にまことの眠り花の寺
花冷や玻璃の固さの丸の内
月の名の橋を袂に花の山

ずるずると

道端 齊

* 春眠の淵ずるずると手を離す
長閑さや診察あとの釣り談義
卯の花や重畳として山深し
ぱんと干すワイシャツ二枚夏隣
組み立てる五球スーパー昭和の日

耕す

小林陽子

* 逃げ水の中へ中へと鼓笛隊
一八やあやめや白き雲流る
大蚯蚓地球耕しつつ縮む
四人目はどこでも授乳麦嵐
水を脱ぎ水となりたる海月かな

闇の桜

村上葉子

* 紙ふうせん突くたびすぐに落ちたがる
土管から子ども顔出す昭和の日
空つぼの心投げ出す雲雀の野
母の佇つ闇の桜の吹雪きけり
龍天に登る下総まつたひら

竹一幹

兵藤 恵

清明や靴三足を磨き上げ
竹の秋一幹鳴ればみな騒ぐ
* 蠅生る生命の初め嫌はれて
麦熟れて放校の日のありしかな
出航の汽笛五月の本を閉づ

蝌蚪の紐

中村重幸

山独活の蝮谷にて採りしもの
始まりと終りはいづこ蝌蚪の紐
* 高みへと目の押し上ぐるしやぼん玉
たたく手の合はぬ赤子やチューリップ
亀鳴くやありえぬことが起る世に

神楽舞

大橋松枝

寺の名のバス停つづき七変化
荒縄に山車組む異人交じりをり
* 夏足袋の踵を軸に神楽舞
サイフォンのポポ鳴る茶房ねむの花
浮草の吹かれ夕空さざ波す

梱包

澤田英紀

手習ひに遅きことなしひこばゆる
結界を巡らす如く畦を塗る
* 梱包の厚き資材や夏きざす
包丁を研ぐ真清水の光かな
* 青田風そらへ空へと柵田駆く

大志

川高郷之助

春夕焼帰ると言はぬ子とをりぬ
山吹や庭に手渡す回覧板
* 賑やかもしみじみもあり花筵
表札に英字と漢字花水木
大志抱けと教はりし日よライラック

結願

金光浩彰

結願の笠脱ぐ空や五月晴
* かはほりや常識といふナンセンス
雉鳩の頸の青鈍夏兆す
今生のほどよく酸くてところてん
漁火の海境分かつ五月闇

沖作品



能村研三選

*レコードのノイズの静か春の夜半

千葉

坂井 博

自分史は旅券の中に春惜しむ

春陰や機銃掃射の犠牲の碑

花筏崩し真間川流れ疾し

少女像のフルート聞くと桜舞ふ

手のひらに侏儒をあそばせ新樹光

更衣主治医へ告ぐる今朝のこと

ぼうたんの百の花芽の息づかひ

点眼の一滴濃くす柿若葉

*更衣心の枷を解きけり

山あひの音一つなき夕霞

みすずかる信濃に遅き春の蟬

*逃げ水や幾つありしか分岐点

品格の句意にも出づる濃山吹

大朝寝したかも知れぬ孟浩然

東京

岩波 博庸

埼玉

工藤 良不

船足を水平線に追ふ日永
総天然色の夢の今なり昭和の日

東京

頓所 敏雄

清明のなほなほ潔し水の家事

霧ぐもり草の狭庭に外来種

春暁や漁り名残の灯のゆれて

大寺の鐘をつきたる月おぼろ

*竹爆ぜて鬼の火柱島開き

苔の花屋なほ闇し五合庵

川底の梅花藻涼し茶屋のれん

縄文の歴史紡ぎて古代蓮

名水を自販機で買ふ春愁

母のものいつしかなじみ更衣

豆飯をつくりしことをさりげなく

農小屋の屋根てらてらと立夏かな

*羽抜鶏かぜ捉へんと走りけり

新潟

本間 照子

青森

中谷 恭子